

# 県立大で全国農業系学生フォーラム

「農を学ぶ立場から、農業の課題と将来像を語り合う」。県立大と県外の大学生が参加した第1回全国農業系学生フォーラム(県立大、薫風・満天ワールド交流塾主催)が7日まで4日間にわたり開かれた。6日には県立大秋田キャンパスで講演と公開討論があり、学生と来場者が農業に対する意見をぶつけ合った。【野原寛史】

## ポト教育

今回の企画は、県立大の1、2年生7人を中心としたメンバーが主にしてインターネットを通じて他校の学生・サークルに呼びかけて実現させた。

県外から参加したのは、北海道大▽山形大▽宮城大▽東京農大▽京大▽大阪府立大―で農業体験や研究をしている学生サークルのメンバー13人。合宿しながら研究報告会や稲作、野菜づくりなどの農業体験をした。さらに参加者同士で「思い描く農業ビジョン」農学生に求められているものは「といったテーマで議論を深めた。

6日の公開討論会では「高齢化の進む農村に若い力を取り込むためには」などをテーマに意見を交わした。農業を手伝っている三種町の上岩川地区での経験を元に「若い目

線地域でビジネスチャンスを見つけないと、ここから30年先まで住めると考えるようにすべきだ(北海道大の学生)との指摘や、「グループで持続性のある、その地域にふさわしい産業を作らなくてはならない(東農大の学生)との意見が出た。

学生のやりとりを聞いていた会場の参加者から「中山間地の農業は、米だけでなく水源も守っている重要性を認識してほしい」という声もあった。

「自給率を上げる意味」を題材にしたディベートもあり、学生や来場者が「食糧不足や他国の有事に備えて、輸入が止まっても自活できるようにすべき

# 農業の将来像 議論深め

「外交関係を崩してまで上げる意味があるのか」と激論を交わした。

リーダーで県立大2年の植田行則さん(20)は他大学の学生と交流して、気付いたことがある。一つは農学専攻で農業系サークルに入っている学生ですら、大学や地域によっては農業体験の機会が少ないこと。ある女子学生は6日に大瀧村で花を栽培する農家に行き、収穫

公開討論会には金足農高や大曲農高など約30人の高校生が来場。農業に関心があるという秋田工高の大塚梨沙さん(18)は「とても参考になった。学生の立場でも、何かやりた

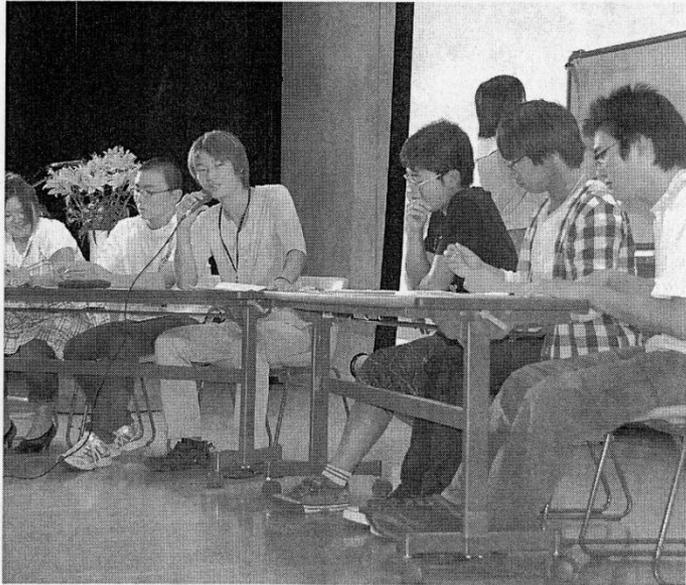
## 「若い力に変革期待」

ではなく片づけなど「おいしいところどり」以外の作業を初めて体験。「今まで現場が見

えていなかった」と話したという。

二つ目は、キャンパスのある大瀧村周辺が学生にとって特殊な環境であること。身近に農を学ぶ資源と現場があり、都市部の学生との交流の中で「恵まれた環境をもっと活用したい」と感じたいという。

植田さんは「今回は種をまく気持ち。より魅力のある企画を作って多くの学生に県立大に来てもらうことも、こちらからも他の大学のイベントに積極的に参加したい」と手応えを感じた様子。将来は国際的なシンポジウムとして、世界に意見を発信したい」と意気込みを語った。



意見を交わす学生たち  
―秋田市の県立大で